

令和2年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

1 学校教育目標

人間として生きぬく力の育成

- ・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子
- ・はげまし、支え合い、共に伸びる子
- ・強い心とたくましい体をつくる子

2 本年度の重点目標

- ・子どもたちの学力保障と基本的生活習慣等の定着
- ・地域や保護者のニーズ及び多様な個性を持った子どもたちへの対応
- ・勤務時間の適性化と教職員の服務規律の確保
- ・附属文化の継承と再構築

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

3 分野・領域ごとの学校関係者評価

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
学校運営	○組織運営 ・管理職がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。	・大学と一体となった学校運営を心掛け、コロナ禍における学校の新しい生活様式に基づき感染症対策に努めた。 ・大学附属学校としての役割と責務を理解する中で教育活動を展開し、大学からの指導の下、職場の労働環境の改善をめざした。 ・働き方改革として、会議や行事の見直し労働時間の意識化を図った。 ・緩やかな教科担任制を導入し、担当教科の研究により専念できる体制とチームで児童理解を行っていく体制を図った。 ・大学支援の下、学生ボランティア「スクールサポーター」を募り、コロナ禍での対策として校内消毒や児童の生活安全対策を行った。	B	・大学附属としてのミッションビジョンのもと、管理職のリーダーシップを発揮し、教育実践研究の推進、教員養成に即した教育実習の実施、地域のモデル校としての役割の遂行を念頭に学校運営を行う。	【取組について】 ・全ての児童が、子供らしい探究心と夢を持ち、また一定の自立心を育める様、育ててくださることをお願いいたします。 ・引き続き、幼・中・大との連携を進め、その成果を小学校の教育活動に活かすとともに、他校、特に近隣市町の学校にも情報提供していただければありがたい。 【評価について】 ・自己評価は妥当と考えます。 ・コロナ禍の中、校内での感染防止対策や児童への生活指導の取組を高く評価いたします。コロナ禍は持続的対応が必要な大災害であり、校内で感染クラスターを起こさないこと自体が至難のことです。健康面にとどまらず、防災や各種行事の対応の工夫など、貴校の危機管理の大きな成果と評価しています。 ・子どもの姿を見取る、評価することは難しく、しかし客観的に評価し次につなげていくことを大切にしています。とりわけ教員間のチーム意識を高めることが正しい評価になるものと思っています。焦点化と短・中期的指標を掲げて、より相互評価をし合えるよう努めていただければ。 ・専門分野を狭め深い教材・授業研究を行うことにより、教育成果を高める教科担任制は「緩やかな」取組よりも積極的に導入された方が、教員の負担軽減につながるものではないかと考えていました。少人数と教科担任制を組み合わせた新学習システムも図の加配の考え方の変化で見直しも必要かと思えます。貴校の取組のメリット・デメリット、課題等ご教示いただければ幸いです。 ・本年度がコロナ禍で学校運営が大変であったかと存じます。次年度は改善方策をふまえ、より良い運営になることを切に願います。 ・教科担任制のメリットとして、教科担当の教員たちが教科指導だけでなく、児童の心の支えになることです。また、いじめや学級崩壊を防ぐことにつながる部分もあると思います。
	○学年・学級経営 ・学校教育目標から、学年及び学級の目標を定め、めざす子ども像に向かい子どもの姿を見取りながら計画的に教育を行う。	・本校の特徴である色別縦割り活動については、コロナ禍の中、行事等を含めて縮小、削減の方向に至った。 ・子どもの姿の見取りに関しては、特別支援コーディネーター、スクールカウンセラーなどから支援と助言を受け、学年で情報交換を行いながら共通理解を図り、学級経営に生かした。	B	・教科担任制において児童理解に関する情報交換を効果的に行う策を練る。 ・教科担任制において、チームで児童に指導支援をきめ細やかに行うシステムを構築する。	
	○危機管理 環境整備 ・児童にとって安全・安心な環境を整える。 防災教育 ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。 健康・安全教育 ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	・門の開閉時間の確認を行い開閉の管理を行った。 ・コロナ禍において、警備員による入構者のチェックや、保護者や来校者に協力を呼びかけ保護者名札や入構証の着用、挨拶の励行、体温測定、入構者記録などで警備を強化した。 ・遊具及び教室の施設用品について、全職員や業者による定期点検を行い、適宜補修や危険回避措置を講じた。改修計画を立て具体的な整備を推進している。 ・防災教育担当教員を中心に、コロナ禍に適した計画を行い、可能な範囲での防災訓練を実施した。 ・コロナ禍における健康・安全について、保健主事、栄養教諭、養護教諭を中心に学校全体で継続的に児童に指導を行った。 ・児童の登下校の安全及びマナーの指導を継続的に行い、保護者にも児童の登下校の安全及びマナーの指導についての啓発を行った。	B	・入構警備の徹底を行う。 ・幼小中合同の避難訓練をより現実を想定しての実践的なものにする。 ・挨拶、廊下階段の歩き方や校舎内での過ごし方、整理整頓等、生活指導、と安全指導、美化指導により努める。 ・児童の通学における安全面、公共マナーの遵守を保護者の理解と協力のもと、より努めて指導する。	
	○保護者との連携協力 ・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。	・コロナの影響でPTA活動を円滑に行うことが困難ではあったが、PTA総務部を中心に、学校の新しい生活様式への支援を得て、感染症対策の充実に努めた。	B	・保護者の負担軽減を考慮しつつ、保護者に大学附属としての学校運営の理解を促し、PTAとしてさらに連携を行っていく。	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育・研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍における学校休業中また分散登校中などの学習保障や、年間学習計画の立て直しなどを行った。 コロナ禍での休校中に、ZOOMによる児童とのコミュニケーションを実施したり、ZOOMでの個人懇談会や入学説明会などを行ったりし、リモートでの教育活動の可能性を探った。 「共創」のテーマのもと、「ともに」「つくる」ことを大切にしてきた本校の子ども観に則って、これからの学校教育のありかたを鑑み、研究を行った。コロナ禍において、研究発表会は中止したが、日常における学校教育の中において、教師は自己の力量を高めながら児童の学力形成に努めた。 CRT検査によって学力の全体的な傾向を把握することで、基礎的基本的な学力を充実する取り組みを続けている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 活用する力が高い児童がいる反面、学力の定着が十分ではない児童もいるため、基礎的・基本的な学力が身につくような学習活動を充実させる。 粘り強く思考していく子どもを育成していくよう学校教育全体からアプローチしていく。 附属中学校幼稚園との連携した研究活動を推進する。 教研式標準学力検査NRTを、年間2回実施し、具体的な学習指導・支援対策に活用する。 	<p>【取組について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な取組と考えます。 <p>【評価について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己評価は妥当と考えます。 新総合領域「未来デザイン」は、本市が市全体で取り組む「かとう学」と通ずるものがあると思っています。附小の教科横断型の単元づくりや授業づくりをこれからも参考にさせていただきたいと考えています。 新型コロナウイルス感染症拡大防止対応に追われる中、可能な限りの取組をされており、特に研究開発学校としての取組には敬意を表します。 ICT活用が本格化する次年度以降、書くことがおろそかにならないようご指導たまわればと思います。 合理的配慮の必要な児童に対し、よりきめ細かな対応が求められる時代である。大学と連携し専門的な見地より適切な見取りがおこなえるのが、附属学校園の強みである。
	<p>○子ども理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども一人一人の内面に対する共感的な理解を深め、心のきずなを深めるとともに、子どもが持っている良さや可能性を引き出し、それぞれの個性をより発揮できるよう指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 個に応じた支援を充実させるため、子ども理解ときめ細やかに指導や支援をする方法についての校内連絡会を定期的に開いた。 合理的配慮を行う上で、特別支援教育体制への充実を図った。 様々な支援及び配慮を要する子どもたちへの対応として、スクールカウンセラーや大学の専門家と連携をとって、よりよい子どもの発達を支援するための取組を継続的に行っている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 校内の子ども理解に関する研修（いじめ、不登校、特別支援教育など）の充実を図る。 チーム力を強化し子ども理解に努めて、生活指導や学習支援に当たる。 合理的な配慮や学習支援などに関して、教師が一人一人の子どもと向き合い、計画的に指導や支援を行う。 	
	<p>○健康な体づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが抱える心身の健康課題に適切に対応し、主体的に食事、運動、休養及び睡眠の調和のとれた健康な生活を送るための基礎を培うことを、めざす。 	<ul style="list-style-type: none"> 体育では、運動文化の視点から、児童の実態にあった教材づくりを行い、校外行事と関連付けながら実践することで健康な体作りをめざしている。本年度は、新型コロナウイルス感染対策として、体育的行事を縮小、制限した。 家庭での生活習慣を適正に保つため、また、新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理の面から、保護者に対して保健日より、給食だよりによる啓発活動を推進するとともに、学校生活の中での安全意識を高めるために学級指導を繰り返し行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 自分の生活の中で自ら健康な体を作る意識を高めさせ、また、コロナ感染対策における3密の徹底を行い、安全で健康な生活を送らせる。 コロナ禍の中、「学校の新しい生活様式」に基づき、体育的行事の見直しを図る。 基本的な生活習慣の確立のため、「早寝・早起き・朝ご飯」等、家庭への啓発活動を充実する。 	
	<p>○研究活動</p> <p>全国規模の研究発表会の開催等による研究成果の普及・啓発</p> <ul style="list-style-type: none"> 附属学校の研究成果について、全国規模の普及・啓発を図る。 <p>研究開発学校制度等への応募</p> <ul style="list-style-type: none"> 文部科学省による研究開発指定などを積極的に活用するため、積極的な応募を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 本年度は、従来2日開催している研究発表会は中止とし、平成29年度より令和2年度まで、4年間の文部科学省主催「研究開発学校」の指定を受けて研究している新総合領域「未来デザイン」の校内成果発表会・運営指導委員会の開催に留めた。 本年度「未来デザイン」の研究は、第4年次まとめの年として、その成果と課題を文部科学省に紙面報告を行った。 ICT教育の充実のために、インターネット環境の整備やICT機器などの充実を図った。 <p><新総合領域「未来デザイン」の研究概要>変化が激しい社会を生きる子どもたちに必要な力として「新たなものを生み出していく（イノベーション）力」「多様な意見を交流し合い、他者と協働しながら創造的に解決していく力」を目標に掲げ、新総合領域「未来デザイン」を構想して研究している。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> 開校以来掲げている「人間として生きぬく力」を礎として、これからの時代を生きぬく子どもを育成する小学校カリキュラムをデザインし、ICTの活用や教科横断型の単元開発などを大学と連携し行う。 問題基盤型学習（PBL：Problem Based Learning）を土台とした各教科の学びを保証する授業提案を行う。 「大学教員と附属学校園教員との連携専門部会」の組織を積極的に活用する。 教科担任制を柔軟に取り入れ、各教科研究をより充実させる。 附属中学校と連携し協働で、9年間を通じた学習活動の充実を図る。 	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
地域・他校種連携	<p>○開かれた学校</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域への貢献をめざし学校の教育的資源を生かす。 地域や社会とつながる教育をめざし教育活動を計画、実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 兵庫県立教育研修所とICT教育の環境整備やオンラインの活用などについての情報交換を行ったり、同研修所から5年生へのタブレット貸し出しの支援を頂いたりした。 本学学生ボランティア「グリーンくらぶ」の協力のもと、兵庫県民まちなみ緑化事業に採択され、構内中庭などの植樹を行った。 兵庫県立教育研修所の主催する講座「児童生徒が使って学ぶタブレット端末活用講座」に、本校教員が講師として参加し、ICT教育についての実践発表を行った。 今夏、加東市より、新型コロナウイルス感染対策として折りたたみ日傘493本（全児童人数分）の支援があった。子どもたちは登下校時のソーシャルディスタンスの確保と暑さ対策として使用した。 附属小学校の元PTA会長の竹内伸吾様からマスク5000枚の寄付があった。学校生活の中で新型コロナウイルス感染対策として活用している。 高学年では、未来デザインの学習活動のひとつとして、「社商店街を盛り上げよう」というプロジェクト名で、各店舗の方々に協力を得ながら学習を進めていった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍で交流の在り方が工夫される中、ICTを活用し3密の徹底を行いながら、地域との連携を図り開かれた学校づくりに努める。 様々なジャンルの地域行事への参加も模索していく。 	<p>【取組について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な取組と考えます。 大学等と連携して実施した、合理的配慮研究事業の成果を、今後の学校活動に活かしていただきたい。 <p>【評価について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己評価は妥当と考えます。 35人学級の導入やGIGAスクール構想の前倒しなど、学校を取り巻く環境が変化する中で、教員の数のみならず質の向上も求められています。一方、年齢に関わらず、不祥事案も起こっており、教育養成の責務の大切な部分を担っていただいている附属小学校には期待するところ大です。今後ともよろしく願います。 ICT活用で、多岐にわたる交流になることを期待しています。 大学及び附属間連携 附属学校園が隣接していることから、生徒指導や学習に関することなどで、幼稚園・小学校・中学校との連携をさらに充実させることで魅力ある附属学校園になる。定期的に情報交換会や授業参観等の機会を設定することで風通しの良い学校園になる。また、積極的に大学教員と附属学校園教員との連携ができることを期待する。 教育実習 教職員の授業力向上が必要であると考え。教科担任制を推進していることから、質の高い授業づくりを目指されていることは素晴らしい。 <p>●分野領域その他</p> <p>【取組について】</p> <ul style="list-style-type: none"> コロナにより多くの事業が中止せざるを得なくなりましたが、この機会に、継続実施すべき事業としなくてもいい事業の選別（規模の縮小も含む）を行えばよいと考えます。 <p>【評価について】</p> <ul style="list-style-type: none"> コロナ禍での学校運営、教育活動の進捗には、ご苦勞されたことと思います。教職員の皆様がまず健康管理に努められ、制約の中で無理しすぎないようにご留意ください。 難しいとは思いますが、何らかの定量的な指標が少しでも導入できれば、経年変化も追えるのではないのでしょうか。 小学校6年間をすごした6年生に、学校評価のアンケートはとられているのでしょうか。 特に初めてのコロナ禍で、運営、教育様々に大変であったことと思います。次年度も、まだまだその中での対応になると思いますが、円滑に運営、またより良いご指導よろしく願います。 コロナ禍での学校運営、教育活動の進捗には、ご苦勞されたことと思います。教職員の皆様がまず健康管理に努められ、制約の中で無理しすぎないようにご留意ください。 大変お疲れさまでした。
	<p>○大学及び附属間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。 大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的物的資源の効率的活用を図る。 附属学校教員が研究実践の一環として大学・学部の授業を担当する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生児童が大学教員の指導の下、「六甲ミーツ・アート芸術散歩」に出展される「六甲珠のれんプロジェクト」に参加した。 幼稚園や中学校への研究大会参加を教員に呼びかけて、交流の深化に努めた。 次年度に向けてのICT教育に関する環境整備や推進計画について、大学教員の指導と助言を仰いだ。 未来デザイン運営委員会及び校内授業発表会では、助言者として大学教員に指導助言を受け、専門的な視点から深く広く学べた。 大学授業(リフレクション及び学部授業)を附属学校教員が担当した。 研究内容などについて、大学教員の指導と助言を仰ぎ、次年度に向けての「理論と実践の融合」に関する共同研究活動を立案した。 大学から、国立教育大学の附属小学校としての教員養成の責務と附属学校への教育実習校としての評価や期待についての教員研修が行われた。 大学と連携して、附属学校園実地教育メンター研修プログラム策定WGが設置され検討を行った。 本学学生ボランティア「グリーンくらぶ」の協力のもと、兵庫県民まちなみ緑化事業に採択され、構内中庭などの植樹を行った（再掲）。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 開校以来掲げている「人間として生きぬく力」を礎として、これからの時代を生きぬく子どもを育成する小学校カリキュラムをデザインし、ICTの活用や教科横断型の単元開発などを大学と連携し行う（再掲）。 「大学教員と附属学校園教員との連携専門部会」の組織を積極的に活用する（再掲）。 研究面だけでなく、実地教育や事務手続き、学校で日常的に起きる諸問題や課題についても大学と連携して取り組む組織づくり（スクールカウンセラーの勤務日追加、スクールソーシャルワーカーの配置など）を進める。 幼小中の継続性に着目したカリキュラムの策定を進める。 	
	<p>○教育実習</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学の計画に基づき、実習生の資質や能力を高められるような実地教育を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 本年度はコロナ禍の影響で、2学期に集中して実地教育を行った。 大学から、国立教育大学の附属小学校としての教員養成の責務と附属学校への教育実習校としての評価や期待についての教員研修が行われた（再掲）。 大学と連携して、附属学校園実地教育メンター研修プログラム策定WGが設置され検討を行った（再掲）。 大学からの研修を踏まえて、教員の意識向上を喚起しながら、実地教育の充実を図った。 タイムマネジメントを行い、限られた時間の中で効果的な実習指導が行えるように努めた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 附属学校園実地教育メンター研修プログラムワーキンググループで作成した実地教育サポートガイドに沿って大学と連携しながら、より質の高い実地教育を行っていく。 一年間をかけて「実地教育にあたっての実施要領（小学校版）」を作成する。 実習生の資質能力の向上と共に、教員の資質能力も高めていく。 	

